

前 言

《日本语听力》编到第4册,难度自然增加不少。有一段时间,我们很难完全按最初设想进行工作。迫不得已,只好放下在手中焐热的笔,开始新一轮的调研。具体包括三个方面:一是向广大师生征求意见;二是重新探讨、研究国内外现有各语种的听力教材;三是加强理论学习,查阅相关的学术论著。半年下来,果然所获甚丰,编写构想逐渐形成,并最终成为本册教材的编写原则。

这个原则可以简要地概括为“听解”二字。我们认为高年级的听力教材应把重点转移到“听懂了什么”之上,而不能继续停留在“听到了什么”的层面上,避免那种话虽听得清清楚楚、明明白白,却抓不住其真实意义的现象出现。其实,这种听力上的“词不达意”情况在母语生活中也时有发生,大概人人都有过这种体验。因此,除了培养学生的强记能力,我们更要培养他们的注意力、理解力、良好的听解习惯和较强的现场反应、表述能力。诚如日本学者渡边博包所言,听力的实质“即为充分理解他人之语”;“我们所听的不过是自己正在思考的问题”。所以,我们有必要引导学生从单纯听音过渡到理性听解,并最终走向创造性地、批判性地接受对方话语的高度。

为此,我们尽量挑选一些词句本身通俗易懂,内容却不易把握、抓准的文章或有声材料作为课文,并在具体设问中力求抓大放小,不在枝节、细节问题上做文章,着重宏观把握,主要解决非语言问题所形成的听解难点。具体设问也因课而异,不强求形式上的一致。我们要求每一课都应从头到尾一次听完,而不能分段、分节或分句多次反复听完。因为第4册的教学目的已不再是考察学生的听音、辨音和听写能力,而是提高他们的整体听解水平。对于少数过于生僻,有碍于听解的词语(那些虽有一定难度,但需要学生自己去判断的词语除外)、我们列于课文之前,同时不再编排单词表。同时,为了更充分体现本册教材的编写原则,我们还在每篇课文之后附了1篇“参考课文”,供任课教师选用。具体的设问方式请参照课文,这里略举数例,做个简单的提示:如第16课的第一段“青春というのは、いつの時代にもちょっと背伸びをしようとする。そうだったような気がする。しかし、それは、今は昔の話になりつつあるのだろうか。”文字并不难,但到底是什么意思,却未必每个学生都能理解,需要教师去引导;再如第4课中的“おじさん”和第1课的

第 17 課	87
第 18 課	92
第 19 課	98
第 20 課	103
第 21 課	107
第 22 課	114
第 23 課	121
テキスト出処一覧表	127
参考文献出処一覧表	129

第 1 課

テープを聞く前に次の言葉を覚えましょう。

ミックス:混合

^{どうらく}
道楽:嗜好

^{いくだつ}
逸脱:脱离

^{とうかち}
等価値:等价

テープを聞いて、後の問いに答えなさい。

現在あのう、いろいろな大学では国文学科とか、日本文学科とかいうものがなくなっていっているんです。それをご存知でしょうか。よく新聞などで大学改革という言葉が見えますね。いま大学というのは非常に危機になっています。学生が少なくなっているんです。学生が少なくなると、先生が困ります。教えることがなくなってしまいます。ほかでもありません。私立は特に困ります。そんな中で、文部省という例のお役所がですね、国文学科とか、日本文学科というような役に立たない学問をやっているところはつぶせというふうなことを暗に押し付けてきているわけです。

役に立たないものがなぜいまだであったんでしょうか。ええ、皆さん国文学科というものがどうやってできたかということをご存知でしょうか。明治政府ができたとき、東京に東京帝国大学、いまの東大ですね、あれができました。そのときに、ええ、国史、国文学科というものができたんです。それが現在の各大学の国語、国文学科とか、日本文学科などの基礎になっていて、そして、その東京の東京帝国大、帝大といったほうがいいでしょうね、帝大のその国史、国文学科の研究手法とか、授業方法というものがそのまま受け継がれてきているという状況があるんです。で、明治のそのころは国語、国文学、国史学みんな役に立たんです。役に立ったと思ったから、お国がお国のお金でお国の学問としての国文学を大学に作ったわけです。それはつまり西洋からいろいろなものを学び、特に日本の国文学というのはドイツの文献学というものを元にして、日本に昔から、江戸時代からある国学というものをミックスして、作り上げたものだった

たんですけれども。そういうものは日本の日本人の国民性というものの、そしてその日本の文化を究明するために大変役に立つというふうに思ったから作ったわけなんです。ところが、現在文部省およびお国というものの思わくがですね、国文学はもうすでに役に立たないものだという方向に向かっていっています。日本人の国民性の解明などというものはもう要らないんだと、むしろ日本と外国、それから日本と世界ですね、というもののつながりなどを研究するほうが大事だと、イコールこれはお国の役に立つんだというふうに変わってきています。いわゆる国際化の時代ということですね。その中で、ええ、まあ、国際化という中で、ですね、国文科というのはいらないから、つぶせと、もっと現状に、現在の現状に合った学科を作れというふうに言われて、まあきているんです。たとえば、アジア文学学科とか、国際情報学科とかいろんな不思議な名前の学科、学部がどんどん今できています。これは学際化、つまり学問の際の学際化ですね。つまり国文学だけではなくて、ほかの学問と領域を接していく、そういう風な一つの枠組みを壊していく、逸脱していく大きな広い領域を対象とする学問、それをやる学校を作っていこうという方向に向かっているわけなんです。

で、こういう中にわれわれ大学教員が巻き込まれてしまっておりまして、私のような、私は国文プロパーと思っているんですけれども、国文学をやっている人間は役に立たない人間ということになってしまっているわけなんです。で、国文学というのは単にカルチャーセンターなんかでほそぼそと生き残っていくというような末をたどっていくのかもしれませんが。大変悲しいことです。じゃあ、こうやって国文学が衰退していったいいのか、なくなっていったいいのかということになるんですけれども、私はこれからの国文学の未来というものをいま真剣に考えるべきときが来ていると思っています。これから国文学が存続するためにはどうすればいいのかというのを真剣に考えたいと思います。で、ええ、ずばり、その私の考えを申し上げておきますと、国文学はもうお国のお役に立たなくていいんです。その代わり道楽として享受されればいいと思っています。道楽というと悪いイメージが付きまといますね。なんか、朝寝、朝酒、朝湯大好きみたいな、そんな感じが付きまといますけれども。道楽というのは役に立たないけれども、知っていて楽しい、人間の心が豊かになる、そういうものだと思います。そういうものとして国文学は生きていけるということになると思います。ええ、これからだんだんと高齢化社会に向かっていきます。いまでも相当な高齢化社会になっておりますね。そんな中で、まあ、年配の方にとって

はあまり体を動かさずに楽しめる、そういう道楽として国文学は、若い人だっ
てかまわないと思うんですね。別に若いから、体を動かしたり、またもっと派手な
ことをする必要がないんです。国文学を道楽として楽しむことができる、そ
ういうスキルを身に付けておけば、将来困らないというのですか、何もやることがな
くなったときに、ひそかに自分が楽しむことができるというふうに思っており
ます。ええ、私はこのように国文学を奉るのでもなく、邪魔者にするのでもな
く、すべてのもの、衣食住などと等価値のものとみなして、そういうふうにして
付き合っていくことをお勧めしたいと思っています。



問題Ⅰ キーワードをいくつか挙げなさい。

国文学 大学改革 道楽 役に立つ 国際化



問題Ⅱ 次の質問に答えなさい。

1. どうしていま日本の大学が危機になっているのでしょうか。

今、日本の大学には学生が少くなり、先生が教えることがなくなってし
まいますから、危機になっているのです。

2. そんな危機の中で、文部省は何をしようとしていますか。

文部省は国文学とか日本文学科など役に立たない学部をつぶして、現状
に合った新しい学科を作ること暗に大学に押し付けてきています。

3. 今までの国文学は何をするのに役に立っていましたか。

今までの国文学は日本の文化を究明するため、そして日本人の国民性を
解明するために役に立っていました。

4. これからの国文学はどんな末をたどっていくのでしょうか。

これからの国文学は大学から姿が消え、ほぼそとカルチャーセンター
などで生き残っていく末をたどっていくかもしれません。



問題Ⅲ 次の文がテープの内容と合っていれば○、違っていれば×をつ
けなさい。

1. 日本では最初に国文学という学科を設置したのは明治前期にできた東京
帝国大学です。 (○)

2. 日本の国文学はドイツの文献学と江戸時代にできた国学というものとミックスして作り上げたものです。(○)
3. 国文学は学問としてはあまり研究する価値はありませんが、道楽としては若者にも年寄りにも楽しんでもらえます。(×)



問題Ⅳ

1. 文部省のいう「がくさいか」の「がくさい」というのは漢字で書くと、次のどれに当たりますか。正しいものを一つ選び、その記号に○をつけなさい。
- ㊤ 学際
b. 学才
c. 楽才
2. 話し手は文部省の大学に対する改革姿勢についてどう思っていますか。正しいものを一つ選び、その記号に○をつけなさい。
- a. 肯定的
㊦ 否定的
c. どちらとも言えない



問題Ⅴ 次の問いを読んだ上、文章をもう一度聞きなおしてください。
そして、口頭で次の問いに答えなさい。

1. 文部省が行なおうとしている大学に対する改革姿勢とその方策について簡単に述べなさい。

大学生が少なくなり、学校の経営が窮地に陥る危機から脱して、大学の国際化を図るために、文部省は大学改革を行なおうとしている。その方策としては国文学科などのような役に立たない学科をつぶし、そのかわりにアジア文学学科や国際情報学科などのような国文学がほかの学問と領域を接していく、つまりもっと大きな広い領域を対象とする学問をやる学部を作る方策が採られています。

2. これから国文学はどうやって生き延びていくべきかについて話し手の見解をまとめなさい。

国文学はもう国の役に立たなくてもいいですが、人々の心に潤いを与えてくれる道楽、あるいは趣味を満たすものとして享受されればいいです。

つまり、国文学を衣食住などのすべてのものと等価値のものと見なし、身近な存在として接すればいいです。

3. あなたにとって、中国文学というのはどんな存在ですか。これからの中国文学はどのような形で存続すべきですか。日本のような大学改革が中国の大学でも行われる必要がありますか。クラスの皆さんの前であなたの感想を述べてみなさい。(200 字ぐらい)

参 考 文

写 真

ある醜い——と言っては失礼だが、彼はこの醜さゆえに詩人になんぞなったのにちがいない。その詩人が私に言った。

僕は写真が嫌いだね、滅多に写そうとは思わない。四五年前に恋人と婚約記念に取ったきりだ。僕には大切な恋人なんだ。だって一生のうちにもう一度そんな女が出来るという自信はないからね。今ではその写真が僕の一つの美しい思い出なんだよ。

ところが去年、ある雑誌が僕の写真を出したいと言って来た。恋人とその姉と三人で写した写真から僕だけを切抜いて雑誌社に送った。最近また、ある新聞が僕の写真をもらいに来た。僕はちょっと考えたんだよ、しかしとうとう、恋人と二人で写したのを半分に切って記者に渡した。必ず返してくれるように念を押しておいたんだが、どうも返してくれないらしい。まあ、それはいいさ。

それはいいとしても、しかしだね、半分の写真、恋人一人になった写真を見て僕は実に意外だった。これがあの娘か。——ことわっておくが、その写真の恋人はほんとに、可愛くって、美しいんだよ。だって彼女はその時十七なんだ。そして恋をしている。ところがだ、僕と切離されて僕の手に残った彼女一人の写真を見ると、なあんだ、こんなつまらない娘だったのかという気がした。今の今まであんなに美しく見えていた写真がだよ。——永年の夢が一時にしらじらと覚めてしまった。僕の大切な宝物が毀れてしまったんだ。

してみると、——と、詩人は一段と声を落した。

新聞に出た僕の写真を見れば、やはり彼女もきっと思うだろう。たとえ一時でも、こんな男に恋をした自分が自分で口惜しい、とね。——これで、みんなおしまいだ。

しかしもし、と僕は考える。二人で写した写真がそのまま、二人が並んで新聞に出たとしたら、彼女はどこからか僕のところに飛んで帰って来やしないだろうか。ああ、あの人はこんなに——と、言いながら。

第 2 課

テープを聞く前に次の言葉を覚えましょう。

ミエミエ: 赤裸的

「はだか」の付き合い: 坦誠的交往

チームワーク: 協同配合

じゅんかつゆ
潤滑油: 潤滑油

テープを聞いて、後の問いに答えなさい。

バハイさんの国イランでは宗教上お酒を飲んではいけないことになっているんだそうですってね。気の効いた趣味を持たない日本人、会社、飲み屋と家庭、この三角地帯を走り回っているだけなのですね。そこにバハイさんはいったい何を見るのでございましょう。

お酒のない国からお酒飲みの天国へ、私はまるで不思議な国のアリスのようにびっくりしたり、ふき出したり、ジュースを片手にいろいろなお酒の世界をのぞくことになったのです。

みなさんお酒が入ってくると、

「だいたいうちの課長は部下なんてどうでもいいと思っているんだ。部長が飲みに行くというと必ず行きやがって、まったくそこらへんがミエミエなんだよ」

と会社では絶対に聞けないような言葉がどんどん耳に入ってきます。中には「部長、あなたももっとデリケートに部下を見てやらんと、たいへんなことになるぞ!」「ひゃっ、よく言ってくれた、和田君」「俺は部長だろうが、社長だろうが、言いたいことは言うんだ」と日頃の会社での関係が全く反対になってしまっていて、私はもうおかしくて、思わず二人のほうに顔を向けると、今度は大声で笑いながら肩を叩き合っているではありませんか。

私はふっとああ、こういうところで日本の会社のチームワークが作られていくんだなと感じたのです。私は酔っ払いがほんとうに嫌いなんですけど、あの

灰色ビジネスマンのそういう話が聞けて、実はほっとしたのです。人間のいやな所も面白い所もいい所もそのまま出てくるのが飲み屋なんですね。私は外国の日本文化研究会にあったら真っ先に飲み屋へ行きなさいと言うつもりです。

それからもう一つ不思議でたまらないのは、飲み屋さんでのものすごいパワーです。みなさん遅くまで仕事して疲れているというのに、カラオケの順番が回ってくると、もう死ぬまでマイクを離さない、といった調子で次から次へと歌いまくります。いったいどこからこんなエネルギーが出てくるのか不思議でたまりません。

夜の新宿や銀座にはネオンの花が咲いています。これも中東から輸入した石油を使っているのかと思うと、ずいぶんもったいないなと感じます。でも、あのようにビジネスマンが飲み屋で作arius エネルギーのことを考えれば、ネオンぐらいの電力なんか簡単にとりもどせるでしょうね。

さて、夜があけて、朝の出勤時間になるとみなさんきちっとした姿で電車に乗り込んできます。車内に見えるのはあのビジネスマン独特の顔ばかり。夜の町、それはお酒の力を借りて、何でも許される、何でもできるもう一つの別の世界なんですね。ストレートに感情を表すのが苦手な日本のビジネスマンにとって、それはどうしても必要な世界なのでしょう。だからこそ「はだか」の触れ合いを求めて夜の町へ出かけていくのでしょうか。今夜も「理屈じゃないよ。お酒は」と乾杯する人々の心に、どんな思いがお酒と一緒に流れていくのでしょうか。お酒は社会の潤滑油、私は日本に来てもう一つの大切な油を見つけたような気が致します。



問題Ⅰ キーワードをいくつか挙げなさい。

三角地帯 チームワーク はだかの触れ合い 油



問題Ⅱ 次の質問に答えなさい。

1. なぜ話し手は外国の日本文化研究会の人々に真っ先に飲み屋へ行きなさいと言うつもりですか。

飲み屋では会社での厳しい上下関係を気にせずに付き合うことができ、職場では見られないビジネスマンの素顔が発見できるからです。

2. 会社では絶対に聞けない言葉が聞けて、話し手はふっとどんなことを感じ

たのですか。

日本の会社のチームワークが飲み屋で作られていくということです。

3. なぜ夜の町は日本のビジネスマンにとっては必ず必要な世界ですか。

日本のビジネスマンはストレートに自分の感情を表すのが苦手なので、酒の力を借りてはじめて自分の本音が言えるし、人間関係がうまく行くからです。

4. 「理屈じゃないよ、お酒は」の具体的な意味を説明しなさい。

理屈の上では酒は体にいいはずがないし、家族との会話も減るし、時間や金銭の無駄にもなりそうです。そうは言っても、日頃の上下関係から生まれる緊張感を緩和させ、自分をさらけ出すことによって相手の懐に入り込むことができるという、理屈では評価できない一面を酒は持っているという意味です。



問題 III 日本語の中には「酒の上でのほだかの触れ合い」を意味する言葉がありますが、それを言いなさい。

無礼講



問題 IV テープの最後に「私は日本へ来てもう一つの油を見つけたような気が致します」とありますが、その「油」の意味するものを一つ選び、その記号に○をつけなさい。

- a. ビジネスマンの出世するための知恵
- b. 生きる活力を得るための手段
- ◎ 人間関係の潤滑油
- d. 日本の繁栄を支えるための原動力



問題 V 文章の内容に合うテーマを考えなさい。

酒場における日本人ビジネスマンの素顔

参 考 文

手 紙

思いなしか、近ごろ手紙を受け取ることが、かなり少なくなったように思う。郵便物の量はやたらに増えるのだが、そのほとんどが宣伝パンフレットや通信販売や公共料金通知の類で、個人からの葉書、封書はまれにしか手にすることがない。それすら、会の知らせや、転居、転職の挨拶ぐらいがせいぜいで、しかも活版で印刷されたものがほとんどだ。何とも淋しい気がする。

原因は、おそらく通信システムの発達にあるのだろう。わざわざ手紙を書かなくても電話でたいい事が足りる。ファクシミリなどという便利な機械もすっかり普及した。葉書や封書にしてもワープロを叩けば、手書きよりも手短かに、はっきりと文面が作成できる。

というわけで、ペン書きの、まして筆による書簡などというのは、もはや過去のものになりつつあるのではなかろうか。げんに、かく言うべく自身、便箋にペンで近況をつづって知人に送るようなことは、きわめて稀なことになってしまった。そうなると手紙を書くのがいよいよ億劫^{おっくう}になる。そして、そんな自分を顧みながら、何とゆとりを失った生活か、と、つくづく情けない気がする。

それにくらべ、昔の人は、じつによく手紙を書いている。蕪村にもたくさんの書簡が残っており、漱石にもおびただしい数の礼状や返書があって、全集(岩波・新書版)のうちの、なんと五冊までが「書簡集」にあてられている。そうした手紙の中には、格式張った挨拶状なども散見されるが、大半は個人の生活や感想を率直にしたためたものであり、したがって当人の人柄をしのぶのに最良の手がかりを与えてくれている。だから、書簡というものは、時によると、作品以上に自己を告白しているといつてよい。

蕪村、漱石、二人の書簡集を読みながら、ぼくがあらためて感慨^{ひた}に浸ったのは、時代は異なるにせよ、現代とくらべて天明、そして明治の文人の交遊世界がじつに豊かであったということだ。むろん、当今の人たちも、それぞれに交際範囲を持ち、生活感情をつたえ合っているにちがいない。けれど、何といても日常のテンポが速すぎる。心にどこかゆとりを欠いているように思えてならない。手紙はいまや、「書類」や「連絡メモ」のような味気ないものになってしまっている